

お前の初めて、全部俺が  
よかった——同窓会で  
再会した幼馴染に  
30年分の独占欲ごと  
抱き潰されて、朝まで  
離してもらえません

指先が、震えている。

同窓会の喧騒を抜け出した夜の公園で、ブランコの鎖越しに伝わるこの人の体温が、じわりと指先から腕を這い上がってくる。

篠原遼太郎。中学まで一緒だった、あのガリ勉の、猫背の、いつもメガネを押し上げていた男の子。それが今、百八十センチの広い肩幅で隣に座っている。日焼けした首筋。太い指。笑うと目元だけがああの頃のまま細くなって、その落差に頭がうまく追いつかない。

声だけは変わっていなかった。同窓会の会場で「凜。お前、全然変わんねえな」と笑ったあの低い声を聞いた瞬間、心臓が一拍止まった。止まって、そこからずっと速い。

「凜、仕事きついんじゃないの」

不意に言われて、ビールの酔いが一瞬で醒める。

「……え？　ううん、別に。楽しくやってるよ」

「お前、昔からそうだわ。しんどいとき笑うだろ」

——息が止まった。

元彼にも、同僚にも、誰にも気づかれなかった。三十一年間かぶり続けてきた「しっかりした私」という仮面を、この人は中学の頃の記憶ひとつで剥がしにくる。

喉の奥がきゅっと詰まって、視界がぼやけた。泣くほどのことなのか——いや、泣くほどのことだった。ずっと誰にも見抜かれなかった嘘を、十年ぶりに会った人にあっさり暴かれた。見ていてくれた、ということだから。

「あのさ」

遼太郎が前を向いたまま口を開く。

「同窓会来たの、お前がいるって聞いたからだわ」

ブランコの鎖がきしむ。私は何も返せない。

「ずっと好きだったんだわ。転校するとき告白する勇気がなくて。十年経っても変わらなかった。……笑ってくれていいけど」

飾りが何もない。不器用すぎて、だから嘘じゃないと分かる。

涙が落ちた。勝手に。自分でも驚くほどあっさりと。

「——私も。私も、好きだった。転校するって聞いたとき、死ぬほど泣いた。言えなかっただけ」

遼太郎の手が伸びてきて、私の頬の涙を親指で拭った。大きな手。硬い指。昔はペンだこしかなかった細い指が、使い込まれた男の手に変わっている。

「泣くなよ」

声が震えている。この人も。

距離が近づく。唇が触れた。柔らかくて、ほんの少しビールの苦みが残っていて、でもそれよりこの人の匂いがした。知らない男の匂いなのに、どこか懐かしい。

浅いキス。すぐに離れて、遼太郎が頭を掻く。

「……ごめん、順番違うわ」

思わず笑った。本当に不器用だ。でもこの不器用さが、作り物じゃない証拠で——

よかった、と思った。この人は本物だ。十年待ってよかった。

「タクシー呼ぼっか。終電もうないし」

スマホを取り出しながら、現実的なことを口にする。明日は仕事だ。大人だから。ここで綺麗に終わらせて、連絡先を交換して、それから少しずつ――

「こういうの久しぶり。二年前に別れてからずっと一人だったから」

何気なく言った。本当に何気なく。

――遼太郎の目の色が変わった。

「二年前？ ……付き合ってた奴、いたんだ」

声のトーンが低い。さっきまでの照れた空気が、一瞬で消えた。

「お前の初めて、全部俺がよかった」

背中に電流が走った。

「初めて」が何を意味しているのか、その低い声が全部教えてくれる。冗談じゃない。十年分の独占欲が、たった一言に凝縮されていた。

両想いのハッピーエンドだと思っていた。告白し合えてよかった。連絡先を交換して、少しずつ距離を縮めて――そんな綺麗な展開が脳内で碎ける。この人の中には、十年分の後悔と渴望が渦巻いている。

膝が震えた。怖いのではない。熱い。「選ばれた」どころではない――渴望されていた。

遼太郎が私の手首を掴んだ。タクシーではなく、駅前のホテルに向かって歩き始める。

「帰すわけねえだろ」

抵抗しなかった。したくなかった。この手を振り払ったら、きっと一生後悔する。十年前、言えなかった告白と同じように。

ホテルのフロントで遼太郎がカードキーを受け取る間、私の心臓はずっと壊れたみたいに鳴っていた。

——ドアが閉まった瞬間、背中をドアに押しつけられた。

キスが深い。さっきの公園のキスとは全然違う。舌が入ってくる。熱くて、強くて、息ができない。

「ん……っ」

大きな手が後頭部を包んで、逃げ場を塞ぐ。唇を割って侵入してくる舌に、自分の舌が勝手に絡みついていた。遼太郎の味がする。ビールの残り香じゃない、この人自身の、甘くて少し苦い味。

くちゅ、と唾液が混ざる音が耳に届いて、顔から火が出そうになった。

「……ファスナー、下ろすぞ」

背中に手が回る。同窓会用のワンピースのファスナーが、ゆっくり降りていく。金属の歯がひとつずつ外れる音が、静かな部屋に響く。背中に夜気が触れた。

——腕で胸を隠した。反射的に。

知らない男より恥ずかしい。この人は鼻水を垂らしていた私も、運動会で転んで泣いた私も知っている。その人に、女の身体を晒す

ということが。仮面も、虚勢も、何もかも剥がれてしまう気がした。

「隠すな」

遼太郎が私の腕にそっと指をかける。無理やりじゃない。でも声は低くて、有無を言わせない。

「十年待ったんだ」

胸の奥がぎゅっと締まった。

——腕を下ろした。

ワンピースが足元に落ちる。ブラとショーツだけになった身体が、この人の目に晒される。遼太郎の視線が、鎖骨から胸元へ、腹から太腿の内側へとゆっくり降りていく。舐めるように、というより——刻みつけるように。

「……凜」

名前を呼ばれたただけなのに、お腹の奥がきゅん、と疼いた。

「ベッド行こう。立ってられねえだろ」

膝が笑っていたのが、バレていた。

ベッドに横たえられて、遼太郎が覆いかぶさる。シャツ越しに伝わる体温が高い。広い胸板。厚い肩。あのガリ勉の少年がこんな身体になったのだと思うと、胸の奥が疼くように切ない。

でも目元だけは、やっぱりあの頃のまま細くなる。

「ブラ、外すぞ」

ホックが外れて、胸が露わになる。大きくはない。自信なんかない。なのに遼太郎が「……綺麗だわ」と掠れた声で呟いて、私の頭が真っ白になった。

唇が鎖骨に落ちる。鎖骨から胸の谷間を辿って、乳首の手前でわざと止まる。吐息だけが触れて、触れてくれない。

「っ……」

「ここか？」

乳首に舌先が触れた瞬間、腰が跳ねた。

「あ……っ♡」

吸われる。舌で転がされる。甘噛みされた拍子に反対側の乳首を指先で摘ままれて、二箇所から同時に熱が走った。

「やっ……両方同時に……っ♡」

「感じやすいんだな」

低い声の振動がそのまま胸に沁みる。遼太郎の大きな手が胸を包み込んで、親指の腹で乳首を押し潰すように擦る。

くり、くり、と。

「ん……っ♡ んんっ……♡♡」

声を噛み殺そうとしても漏れる。この人の指に、この人の舌に、身体が全部開いていく。元彼のときはこんなに早く火がつかなかった。同じ場所なのに、快感の深さが全然違う。

——この人の手だから。この人に焦がれた十年があるから。

唇が胸を離れて、腹を辿り、下腹部へ降りていく。

「っ……待って」

「待たねえ」

ショーツの上から、指が触れた。

「——こんなになってんのに、我慢してたんだろ」

ぐっ、と布越しに押し込まれる。濡れている。自分でも分かるくらいぐっしょりと。恥ずかしくて目を瞑りたいのに、遼太郎の目が真っ直ぐで、逸らせない。

「っ……だって……」

「昔、授業中にお前がうなじ触る癖あったの、知ってた」

不意に首の後ろに唇が触れた。

「ひ……っ♡♡」

声が勝手に出た。首の後ろ。自分でも意識していなかった場所を、遼太郎の唇がゆっくり這って、舌先がなぞって、歯で軽く食む。

「集中してる時、ここ撫でてただろ。——ずっと気になってた」

中学生の頃の仕草を覚えている。そこを感じる場所だと見抜いている。私自身が知らなかった身体のコールドを、この人が暴いている。

「バレてた」という羞恥と、「見ていてくれた」という歓びが同時に込み上げて、目の奥がじんと熱くなった。

「……ずるい」

「何が」

「全部……全部覚えてるの、ずるい……」

「忘れるわけねえだろ。お前のことだぞ」

ショーツを下ろされる。自分で脱ぐより丁寧に、ゆっくり。太腿を伝う指先の感触に鳥肌が立った。

裸。この人の前で。

脚を閉じようとしたのを、膝の内側にそっと手を添えられて止められる。

「見せて」

「やだ……♡ 恥ずかし——」

「俺以外の奴に見せたことあんのか」

——声が低い。独占欲が、剥き出しで。

脚を開いた。自分から。この人になら。この人にだけなら。

「……すげえ濡れてる」

指がそこに触れる。クリトリスの上を、ゆっくりなぞった。

「ひ……っ♡♡ あっ♡」

くちゅ、と音がした。自分の身体から。恥ずかしくて死にそうなのに、遼太郎の指がそこから離れてくれない。

「力抜け。全部俺が覚える」

指が割れ目をなぞる。上から下へ、ゆっくり。溢れた愛液をまんべんなく塗り広げるように。くちゅ、くちゅ、と卑猥な水音が狭い部屋に響いて、顔が熱い。

「っ……やだ、音……っ♡」

「お前の身体が鳴らしてんだろ」

クリトリスの皮を指先で押し上げられる。剥き出しになった敏感な突起に、親指の腹が直接触れた。

「ひぁ……っ♡♡」

くるくる。ゆっくり回すように擦られる。

「あ♡ あっ♡ そこ、だめ……っ♡♡」

「だめなのか？」

「だめじゃ……ないけど……っ♡ だめ……♡♡」

「どっちだよ」

低く笑う声が耳朶に触れて、その振動だけでクリトリスがびくっと跳ねた。

指が下に降りる。膣の入り口に、指先が当たる。ゆっくり、沈んでいく。

「あ……っ♡♡」

一本。中指が、ゆっくりと私の中に入ってくる。

「……きつい」

「っ……♡♡」

遼太郎の指が太い。硬い。仕事で使い込まれた男の指が、私の中の壁を撫でるように動く。

「ここ？」

奥の壁を、指先がこつん、と押した。

「ッ——♡♡♡」

声にならない。身体がびくんと跳ねて、無意識に遼太郎の肩を掴んでいた。

「……ここだな」

そこを集中的に、くりくりと擦られる。指先が私の中の一番弱い場所を正確に見つけて、何度も何度も押す。

「やっ……そこ……っ♡♡ 自分でも、触ったこと……ない……っ♡♡♡」

「だろうな。でも俺は触る」

二本目が入ってくる。ずるり、と。きつい。でも痛くない。愛液がたっぷり出ているから指が滑るように奥まで届いた。

「はっ……♡♡ あ、ああ……っ♡♡」

ぐちゅ、ぐちゅ、と音が変わる。二本の指が私の中を探るように動いて、壁を押し広げて、奥を抉る。

「凜。お前のここ、すげえ熱い」

「言わない……でっ……♡♡」